

2022年横浜ナザレン教会・待降節第二主日(12/4)礼拝

「命の光、真の王」

使徒言行録第九章 1節から9節

【聖書】

使徒言行録 9:1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしはあなたが迫害しているイエスである。6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。8 サウロは地面から起き上がり、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

1 王として来られるキリスト

教会のカレンダーは、待降節に入り、今日は第二週目です。今年も、2000年前に起こったクリスマスの出来事を思い起す季節となりましたが、待降節は、過去の出来事を思い出す時だけではありません。未来の出来事にも心を向ける季節です。どのような未来の出来事に心をむけるのでしょうか。十字架と復活の主キリスト・イエス、今は父なる神のみもとにおられる方が、再びこの地上に来られる、という出来事です。その時、主は、どのようなお方として来られるのか。今日の礼拝の招きの言葉にあるように、「私たちの王としてやって来られる」と預言者は語ります。真の王キリストを待ち望む心を新たにす待降節を、私たちは、今、生きています。

さて、今日の聖書は、「サウロの回心」として知られる物語、使徒言行録の中でも最も有名な物語と言ってよいでしょう。ヘブライ語の名前では「サウロ」、ローマ名では「パウロ」と呼ばれるこの人物は、教会の信仰に計り知れぬ巨大な影響を与えました。それは聖書にも現れています。新約聖書に含まれる21の手紙のうち、パウロが書いた、或いはパウロの弟子たちが書いたとされるものは、三分の二の、14を数えます。もしパウロが回心して主の弟子とならなければ、現在の教会の信仰はありません。ですから、今日の聖書には、全キリスト教会の歴史的重みが集中したような瞬間が描かれている、と言っても言い過ぎではないし、世界の歴史を変えた瞬間であったのだと思います。

しかし、言葉では語りつくせない程の重要人物であるパウロですが、今日の聖書の物語の主役ではありません。主役は、天上から語りかけられたキリスト・イエスです。そして、この

物語には、先ほど触れました、終わりの時にやって来られる<真の王なるキリスト>がどのようなお方であるのか、が描かれているのです。今日は、サウロの回心物語から、私達の真の王、キリスト・イエスのお姿を見て行きたいと思います。

2 神の敵 サウロ

ルカは、サウロが、意気込み前のめりで教会を迫害していたことから語り始めます。ステファノの殉教がきっかけで始まったエルサレム教会への大迫害ですが、その対象はギリシャ語を話す信徒達に限られていました。彼らは、散り散りになってエルサレムの外へと逃げて行きます。しかし、サウロは諦めず、よその町にも迫害の手を伸ばします。有数の世界都市、大都会のダマスコにも多くの人々が逃げて行ったのでしょ。サウロはダマスコ行きを決意しました。何故、彼はそこまでするのでしょか。

今日の物語よりもずっと後、パウロはガラテヤ教会に当てた手紙の中で、次のように語っています。「自分は熱心なファリサイ派の一員であり、徹底的に神の教会を迫害して滅ぼそうとした。」ファリサイ派というのは、律法を厳格に守って生活していた人々です。ところが、ステファノ達をリーダーとするギリシャ語を話すキリスト信徒達は、この律法を捨て、他の人にも捨てさせようとしている、サウロはじめファリサイ派の多くの人びとは、そう信じて、彼らを神の敵とみなして迫害しました。勿論、それは誤解ですが、彼らが誤解していた事は他にもありました。

神に救われてこそ、律法を守る力を与えられる、それが聖書の真理です。つまり、律法は、救いの結果であり、「律法を行えば救われる」という救いの条件ではないのです。しかし、ファリサイ派の人びとは、それを勘違いし、律法を完璧に守って救われようとしてました。その結果、どうなったか。律法を守れる自分達こそ聖い存在だ、と誇り昂ぶり、律法を守れない人々を罪びとと蔑み、切り捨てたのです。彼らは、律法を守る事を第一としたのに、最も大切な律法、神と自分と隣人を愛しなさい、との戒めを疎かにしました。どうしてそんなことになったのか。

自分達の聖さや正義を求め、真の神を求めることをしなかつたからだと思ひます。真の神を求めなくなつた時、たとえ信仰者であつても、自分達を神としてしまふ、ファリサイ派の人びとが、律法を守る信仰深い態度とはうらはらに、主イエスを十字架に架けて殺したのは、彼らが神になろうとしていたからだと言へるのではないでしょか。

それはファリサイ派に限つたことではありません。神ならぬ人を神とする、それは、神が造られた美しい秩序に逆らふこと、真の神を棄て自分達を神として生きようとして、多くの神々が現れ、それぞれ自分達を絶対化し、憎みあい争ひ、果ては殺し合う…人類が続けて来たことです。神がいない、死が支配する闇の世界を、わたし達人間は造り続けています。

しかし、死の闇に捕らえられている時に、私たちは、自分達がそのような闇の世界にいることにさえ、気付きません。サウロも、そうでした。彼は、神の熱烈な味方のつもりです。しか

し実際は、自分達を神とし、神に敵対し、死の闇に属する者でありました。そういうことは、わたし達にも、私たちの教会にも起こり得ることではないでしょうか。

3 天からの光

さて、ダマスコでのキリスト信徒の搜索・逮捕の令状を大祭司から手にいれたサウロは、意気揚々とダマスコへと向かいます。古代世界有数の大都市ダマスコを間近に見る地点まで来た時、「突然、天からのまばゆい光が彼の周りを照らした。」と、ルカは語ります。この部分のギリシャ語を直訳しますと、「突然天からのまばゆい光が彼を取り囲んだ」。まるで、真の王、キリスト・イエスが、闇の陣営の兵士であるサウロをぐるりと天からの光の兵士で取り囲み、逃げられないようにしたかのようです。サウロは、天からの光に不意打ちを受けて、地に倒れ込みます。何が起こったか分からず混乱するサウロに語りかける声がありました。「サウロ、サウロ、何故、私を迫害するのか。」サウロは言います。「主よ、あなたはどなたですか。」声は答えます。「私はあなたが迫害しているイエスである。」

この答えがサウロに与えた衝撃は、はかり知れません。「イエスは、律法を蔑ろにし、十字架で神に呪われた者として死んだのではなかったのか。彼が復活して生きている、と言う話は、真実なのか！」あまりのことにサウロの頭は真っ白、今まで自分が固く信じより頼んで生きて来た基盤がガラガラと崩れ落ちていきます。彼は、天からの光に包囲されて初めて、自分が闇の中に囚われている事に気づかされたのです。このようなサウロの身の上で起こったことは、真の王、キリスト・イエスの審きであった、ご自身に敵対するサウロを滅ぼす審きであった、と私は思います。

ですが、天からの光によるキリストの審きは滅ぼしただけで終わりません。必ず新しい命を与えてくださる審きです。何故なら、ヨハネ福音書の冒頭にこうあるからです。「初めに言があった。言は神と共にあった、言は神であった。…言葉のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。」命の光とは、真の命であるキリスト・イエスを明らかにする光である、とヨハネは語ります。その命の光がダマスコの近くで、神の敵サウロを包みこみました。この天の光の中で、サウロは決定的に新しく造り変えられようとしています。命の言葉、真の救い主キリスト・イエスを知る者に造り変えられようとしているのです。

4 <自分ごと>としてくださる真の王

それは、私たちも同じです。天からの光の中で響いたキリスト・イエスの言葉こそ、真の王キリストがどのようなお方か、どれほど人間の王と異なるか、を私達に教えてくれます。サウロが迫害したのは、主イエスご自身ではなく、主イエスを救い主と信じる教会の一部の人びとでした。しかし、ここで、光の中の声は、キリストを信じる者達の教会を迫害する事は、キリスト・イエス自身を迫害する事と同じだ、とサウロに告げています。確かに、かつて主イエスは、

同じようなことを、弟子たちに語りました。「あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのである」(ルカ福音書10:16)。

しかし、主がそのように語られたのは、地上の主に従った直接の弟子たちに向かってでした。一方、サウロ達が迫害していたのは、地上の主とは直接面識のない人々、ギリシャ語を話すユダヤ人で、使徒達の伝道によってイエス・キリストを信じるようになった人々です。そのような人々を迫害するサウロに向けて、「あなたは私を迫害している」と主は仰いました。ですから、主キリスト・イエスは、教会の伝道を通じて福音を告げ知らされ、主イエスを見た事がないのに、「我が主、我が神」と告白する者達をもご自身に属する神の民としてくださるとわかります。そう、私達もそうです、私達のこと、ご自身の者、キリストの民としてくださいます。

そうして、主は、神の民、キリストの民となった全ての者達の痛み苦しみ悩み悲しみを、決して他人事(ひとごと)とせず、自分の重荷として背負い、私達を支え助け導き癒し励ましてくださる。キリストの民として、この地上を生きる力をくださる、それが、真の王、キリスト・イエスです。

パウロは、この時に聞いた声を決して忘れなかったのだ、と思います。彼は後日、幾つかの教会宛の手紙の中で、「**教会は、キリストの体である**」と繰り返し述べているからです。地上を生きた主イエスと直接会った事もなく、聖霊降臨の出来事にも立ち会わず、初代教会の創設メンバーでもないパウロがどうしてこのように教会について断言できるのでしょうか。復活のキリスト・イエスから直接聞いたから、としか考えられません。

そして、<真の王>キリスト・イエスが他人事(ひとごと)としないのは、ご自身を信じる者達だけではありません。主は、ご自身の民を迫害し殺そうとしている敵、神の敵さえも、「ひとごと」にはなさないのです。

「**サウル、サウル**」。聖書でその名前を二度繰り返し呼ぶのは、特別の深い想いをこめて呼ぶ時だ、と言われていています。かつて主イエスは、主と弟子たちの世話のために、かいかいしく働き、忙しすぎて大切なことを見失っていた女性に呼びかけました。「**マルタ、マルタ**」と。審きの厳しさの中にも、慈しみの響きを持って、キリスト・イエスはご自身を迫害する者の名を呼びます。「サウロ、サウロ」、呼ぶ名は、ローマ名のパウロではありません。ヘブライ語の名前です。サウロは、ローマ帝国の領土で育ったユダヤ人ですから、普段でもパウロというローマ名で呼ばれることも多かったでしょう。しかし、サウロ自身、熱心なファリサイ派でヘブライ人であることを誇りにしていました。だから、「パウロ」という名前よりも「サウロ」という名前と呼ばれる方が、本当の自分が呼ばれている気持ちだったのではないのでしょうか。キリスト・イエスは、そのようなサウロを理解し、「サウル、サウル」と呼びかけられたのだ、と思います。御自身を迫害する敵の中へと分け入ってください、その魂に語りかけ、ご自身の方へと招かれる、それが、私たちの王、キリスト・イエスです。

このようなこと、まさに2000年前、飼い葉おけの中に人となった子なる神しかできないこと。クリスマスの夜、人となられた神の独り子は、私達人間の代表となるべくこの地上に來られ

ました。神を神とできない私達の代わり、私たちの代表として、神を神として生きる事に徹し、神を神として生きる命へ招いたのです。そして、私たちの代わりに、私たちの代表として十字架の苦しみの極みで、「我が神、我が神」と神を呼び求めてくださいました。私たちと同じように死んで葬られます。ですが、それだけではない、更にわたし達人間に先立ち、私たち人間の代表として永遠の命へと甦られたのです。

ある説教者が語っておられて、私もそうだなあ、と思ったのですが、人間の王、神ならぬ自分を神としている支配者達は、自分の為に死ぬことを、私たちに求めます。しかし、真の王キリストは、ご自身の民の為に、死んでくださいました。いえ、信仰者だけでなく、ご自身の敵のためにも、死なれたのです。このような王、支配者は、人間世界にはいません。真の王、キリストだけです。

5 諦めない神

このように聖書が語る救いの物語を思い巡らすと、神の途方もない忍耐力に驚かされます。今日のサウロだけでなく、人はいつの時代にも神に逆らい続けてきました、今も逆らい続けている。「自分達が神になり、自由に生きればいい」エバにそう誘った蛇は、どの時代にもいます。私たちは、その誘惑に負け、神の力を侮り見くびり、神を諦めてしまいます。何度も何度も。ですが、神は違う。私たちのことを決して諦めません。驚くべき忍耐力を発揮され、繰り返し繰り返し預言者を送り、遂には独り子さえも、ご自身に敵対するこの世へとお与えになったのです。生命の源である御神が、私たちが諦めてしまったら、私たちは立ちどころに滅びるしかないから。神はわたし達の愛ゆえに諦めないのです。

先ほど共に読み交わしたイザヤ書第9章には、次のようにあります。「**ダビデの王座とその王国に権威は増し平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。**」ダビデの王座とその王国というのは、再びやってこられる王キリスト・イエスが支配される王国のこと、と教会は信じます。その王国をもたらすのは、「**万軍の主の熱意だ**」と預言者イザヤは語ります。どんなことがあっても私達人間を諦めない神の情熱です。

2022年のクリスマス、戦場と化した平野も町も冬の寒さに凍えています。飢えと寒さに苦しむ人々がいます。神を神とできない人の罪ゆえに、多くの悲しみや痛みが世界に満ちており、死が溢れています。しかし、聖書はそんな世界に向かって宣言します。「**光は暗闇に輝いている。暗闇は、光に打ち勝たなかった。**」(ヨハネ福音書1:6 新改訳2017)。真の支配者である天の御神は、私たち人間を諦めずに、天からの光、命の光を照らします、そして光の中で、信仰者を起こし、真の王、キリスト・イエスに属する神の民、光の子を起こし続けてくださるのです。

そんな証拠はどこにあるのですか？ そう問う人がいたら、応えたい。「それはわたし達一人一人。私たちは、神の諦めない熱意あって、ここに生かされている、証人です。」そのよう

に言えるのは、私たちの信仰のゆえではありません。ただただ神の敵サウロを用いた方が、私たちをも用いてくださるからです。神がわたし達をあきらめずに用いてくださる。だから私達もあきらめずに天からの光、真の王に仕えることができるのです。何度、闇に呑み込まれ倒れこんでも、真の王、キリスト・イエスは命の光で私達を囲んでくださり、サウロに語りかけたように、私達にも仰います。「立ち上がり進みなさい。そうすれば、為すべき事が知らされる」

神を神とできない者、神を諦めてしまう者、神の独り子の聖と義と贖いに値しない不信仰な者達をも、命の光で包みこみ造り変え、真実に生かしてくださるお方に感謝と賛美をささげます。